四山藁　一

へ 5
4397
1

文政四辛巳春刻成

夏成美先生著

# 四山藁

豊久蔵
米包徳
齊包昌
夏包壽
仝校

東都書林
慶元堂梓

門 へ 5
號 4397
巻 1
へ5 4397 1-2
昭和九年七月五日購求
9-7-5

## 四山藁序

隨齋嘗以誹諧學爲當時之宗匠。其名詞奇句既存于世人之齒牙矣。諧話二卷。其子色壽蒐叢集以襄于梓。又有題跋記事之

文。凡數百篇亦同加校讎。以
公之海内。乃徵序于余。之
讀之其文皆如名香美錦。
郁然爲新。且其危之署衍。
狂言猶邁。可以醒世間恂
憒〻醉去亦不尠矣。此集

題曰四山叢。蓋取諸蕉翁之
行次歲來瓢銘云。嗚呼怩
齋私淑於蕉翁之學亦可
以見也已。因序隨齋名邑
嘉字成美。姓復目氏。怩窩
其號也。

文政三年庚辰秋八月
鵬齋老人興譔
亦顛道人柔書
邨嘉瑞刻



# 四山藁第一

隨齋夏成美著

豐嶌久藏
米津包德　同
齋藤包昌
夏目包壽　校

## 望筑波山辭

東籬乃菊みたれ咲て居るも耳にかまびしく小春まち紀秋乃
なか經をしはんと柳ちりゆくひと葉の小舟に棹さし津り
あや彫の流きのあら枝多かき松杉も多ちあくせしむら尾花ハ
たゞしたまふへ乃霧ふるひさと川邊の芦はなしひく波きあて

くまるものなくみえわたるはこのみちに黛乃色水天のみどりを
わかちてあふげハおほふさ利にみゆるもれそはつく波の山なりけり
男躰女躰乃ふたつの峯ならびやうにまつ波まその神秀なりハ
いふもさらなり上からつ代のふることにしかうちこそなふとおくかうしけ
ふるれさまハ春ハ嵐雲かむらさきのかすみなびくにはなれるを
ものもみちの陰 わかうしく今ハ老杜か眺を飛鳥の入るに
けくあらしにさふ紀三冬ふたつれを雲けのうちをあつめくる
かもやきまさえし 万葉集乃ふるき歌かえ波てあとひやりまた
ほとに新治の神 詠あらしより連歌するわざれとまとそく
なれるふをめてみな事のかきりまで筑山ともにうごきなき

言葉乃みちのまさきもし仁者のたのしめるといふなか孫をおぼし
みなひとつとおなくありすむかり波たかしきそれの風色ふこそ

## 代枕集序

安永癸巳年作

玉石のまかりを寶かせるも拙の見る所ハ佳しに一瞬ふ過に
草波みつ岩々まくらふあそびさ波を盡くして東漂西泊の
まよりけるぬぬ中にもなおかちふ中古乃風雅をたのめる落穂
舎のほかしえ作りぬる事乃秋錦りんかの枕ふはかし及古の
中から利古人乃まつ[illegible]すさひこれをうしやおもへ数叛し
あるとえる出て蒼識郎乃津田ふ葉作しぬらして投出せる
ものなまされか名津なて拙の事乃あし清しなとも書くく

よといひわかれし後法師ハ風雲に行方をしらしぬ われまた
沈痾のものとなりて臥くらしにたえし乃冬春夜法師か
東行乃ことをきゝ一筆かのめかせしれわし使をまちしくれかまた
たりのかへりきたりしとて居りて袂の帰京にかけ法けて草稿
をかへし侍りきそれをもて主か名を代枕集といふ看書乃悪
魔おそとといふい侍しめも侍る此きゝれの黨乃まゝらにたゝ仮名
草紙にすゝめあらしゝおもふうに霞ふし乃枕を拂て
浅草の里夏成美随斎寓灯乃もとに書

## 鳥鶉帖 天明甲辰正月作

去年乃むつきを庭のうゑ 逆数まを軒の雀にかよひ

ろるふうおもしハまれはゆうほむ給ひてこの庵にうきくも
をうしろれと花守に何をひ哉おかしうも我 今のまへしゐまし
かくても申いて侍る

よりう襟しく我宿に梅にみを待い

## 乞食袋集跋 天明丁未年作

乞食ふ吾ハなにをかなくまへたるいはし へ石山乃おく
ある木蔭のむち椎はき紙の翁か園のまゝ去来叟か嵐に
いたみ新績の柿丈草ほうしか居乃への此栗 曾良か
わひねの木曽の椽樗の外をしみてちりたる花婢捨乃

かゝる月ひ浴ひあつめくて法ゆふ風雅のたすけとなれ
袋のあるし重厚入道をかりて竹窓のほとりを辞して
身を順礼道者のよそほひにやつしぬれは東坡居士か上ハ玉皇
大帝に侍をはしへ下もを悲田院乞児と枕をならへんとせむといひ
けむ和漢同一味のおもむきなるへしと思ひくれはその紐をとく
ものは浅草乃野人随斎成美

非仙集序　円年作

或ゆふへ列仙傳といふ文をみる侍りしに石を打て羊
となし ひさこ乃中より馬を出せ 紙を舟としてうみをわたりひ
風をのまもかすにあらして おほをそらにはしるなとすゝそおほし

きる百年なりけれおもしろきねふりをわすれて見ても
てゆくれそのゆめにかゝわれともわさはひをのかれむとほくかゝる
ほとる者のをりふしもはなしれるなりしか屋すくなく
いひのいてくるよりはしめ見しおもしろくもはやくなりしかも
なりて後そて與はさそ世をね思ふに文よくかく人乃筆に
まかせたりはしらいふにあやしくもゐへかれたる紙にすしるしおかれも
文章に實なくそなくく翫ふ人はわすれたるへし わかはいのめる
俳諧乃みちもたゝ世にあるしくいはくか風雅の實を持とあり
あるに一時のいのりをもとめてなりて後まゐるに名にゐる人なくあり
ゆゑ侍らむかその風雅の實といふそ 梅を咲 はゆるき花とる

紅葉はなき木ずゑにおとろふる變化流行のありさまに
ふく心をとゞめて侍てやまらざりしゆくものこゝろに添けて
いひ出る詞花言葉を八重九重にいふなるを百しほちしほに
染め侍る身をも誘ひまて馬をはせ羊をはせてころころに
游ずて浪をはしるも宙にかけるあそび手を覚えすより安る
事しり侍なりしと同椊の人等すゝみまゐらするをとゞめてかく俳
諧の幻術に於て戯しなまふへしとゆふおもと志すの外は

一夜流行奥書 天明戊申季冬作

浪花遅月上人將探奥羽之勝掛錫於余隨
齋一夜篝燈相與作擬古俳諧至明得若干
首蓋余之於上人碔砆與美玉其復何論也
但志好之所同或可以附上人驥歟遂鐫以
示同好焉

浅草集序 寛政己酉年二月廿一日

かい屋をすりへらふ報反故をかうや紙の其れにはあらて浅
くさのなり様のするにあら庵し清く長肅子が野なるにかり
うふときまえし古人乃はみ残し多る糟粕をかきあつめけ
ぬる料紙となせりけれはみちおくさまれありにたれたる作意も
おくされの雲耳にたされる穂のみなみおほつかな紀言のえらもを
つら稀なまてをいまなひとゝむる浅茅なららんにうすく侍らむ

よのなかや是此集の趣ならし

志みおすも里序　円年作

西を志らぬひのはくし東を善知鳥なる外か濱とおろ
くの水のなかれ山乃ふもとすまひる侍くはしきハかきつくされぬほと
おほくの年脚病ありて一歩をすゝむることかたくなるにし
たかひねそこひまて川なくもたかくれたるゝたく乃すき人か
はひおくれる発句ともを書とめて船中ふへは是をよみ味
山水乃清音あるにおもひよそへてわかこゝろ東漂西泊の
心をなるかのおふ津らか禁足旅記ハ人をたてゝおもふ燮
に至るこれを見の気よれ文乃津ても枯をたねとこ社

風に誘ふ雪ちに夢の處をきゝんその人に徃りふ
おちをするなかはけて志ふのももとしいかすを白氏か
經年不展縁身病今日閑看生蠹魚と詠られし不
たもひたをせてあそこなほ殊のくれ俳意よまれて人と
を波をわすれる如の緒おし乃はしのおくの花も小ほのか
さとく沙漠乃さ紀のわし乃吹山の月もきゝろの泉すゝろ
なむおもしろみわらひらゆかりおもかけの多そや俳諧独行
の旅人隨齋夏成美なるを

送遲月上人序　円年作

梢乃ゆかし汝の里をいるて船よく諸松嶌乃浦にあそを無と

卯のちれ乃雪をふくほころきすに笠うちかけて出る人を
浪花乃遅月上人なるを持のまたれ不なりて打りふさく あるを
去年の冬なにくれとなく随斎よりゆくへみを定てすみし河上
木かけしをきて三保の雪に歩をいとふして風雅のまことを
かたらしよりわきいさくの嵘々洋々の音をしれるに 伝して此
春を根岸の里に鴬をたつね葛飾の梅乃ひかりをさそひと
おもひ上野浅草乃花のあすなる大井戸川乃桜のさかりをも
君いへを わきまへ和し 是口をひらけと法をさとし とうなれはさ
清新乃うちにみちあふひ響の本意をあらはし おもひに
訓せしも萬花なち波ち散 法まて 波あしさ わかち葉の



ちはさす離別乃袂をしぼる斧をぬきつして 弦をなけ
それもわかれをかくむるに虚くあしと心をえしてあまたに
世の中に風雅をすてて遊めなすをみるにおほく名
利なとにみえて山水に眼をうつし上人名と利との法かひり
あり須ひかへに西行宗祇の足跡しを見つ其世代の翁乃
旅枕をたひて東奥にふかれたる俳諧のたよりをむかひて貞享
元禄のむかしより思をひとつを心に世をしのれて人の路
をふみひて求むるあるたくひかれ 実に泉石をもて
何をふ人といふ者し君よし此心をもて杖をめくらし法を草に
かせをくるへ我のひくさにありとなるあらく人あら風雅の正道に

入唐しけれとも上人の風格ゆかしく高き方にたちかへりてよろこひよ
ものすくなからむもやまさきら浮ける人にもいふかれしかまほを
きゝてよ孫あふものを陸川嵩乃松象濱の月
毎年七十をこえてふきさくみな月孫日の祝ひに氷室の氷にも
あらぬ涼しき酒をもて一杯の壽をまゐらする蓬莱のいく茶も
たまり求めさせしめて
月ことに一日不二まうての津にむかひて那
まへさ此後いく春秋の寒暑を凌くへき具七種を数へまゐらせよ
ことへてまゐらす

寄杖

つくゑらに清かそへよ鶴霍の脛

寄團扇

風のそよぎ團扇に老もうちまたなれ

寄紙

夏菊やふところかみのいくかさね

寄酒

一夜酒かもしけむた醸しのまゝ

寄綿

ことし身や孫を清くの手にて雪氷

寄炭

けふといへと齢をたのしむ風炉の炭

寄襪

夏足袋もしらしく踏ぬ風情哉

寛政元年六月一日

實とりふ氷砕くなひむろ守

此句はいつのむしなりん我男なりせる時家父のふし語ふ辞なりしこの句を冬は氷のごとなり月かけて踏れるものもせる人の故ありけりされど実を失ふるすかくれなくせよとの庭訓なりし豚児包好（後改包壽）佳例ふたつのまくらく乃ふ首服をむかふ我恩なるによりて示し給ひき詞なりけれど多か世一家の氷をはなへさせの心を忘れはをれ包好ことかれ汝のちぞれ父の教なり汝それをこたへておろそかにするなまくふかき渕にのぞみ氷の上をふむごとくちかうらくも汝の心をうしなふ事なかれとも也

なのはもとき室れ氷なと清きらと

寛政改元年六月一日

湧出臺記　寛政庚戌年作

臺あとは湧出といふ地の高さ二万由旬碧瑠璃をうけたる也し雲煙を臺にめぐらし月乃みちくよせて星乃林

陰ふかきをしけきをもとむる紛の筑波山あるいは絵に写す庵く
浅草川のなかれハ足ひたしぬへし波ちかきわか挟室
暑をしのくにあまりも所くある者に許すをはかるにかの者のいふ
此の屋のうへに小さき土居をこしらへ板をわたし庇よりはしこを
掛けゆふ風にまさるにの折から三四人か涼む屋なれりハ
心安かるへしといふ時を得てのすよくせむことといふにおのれ
やしき紛工乃おとと二郎なるへきをむかし浅草大工と
いふハ東鑑にも見えたる柳の上手乃すゑに傳るなる
異なりとめかしていとよきうけあひぬかくて木をゑり板を
志くハせなくして広くてまて来りてあと一日ハ不日に造り終れり

波ちかきにふさはしき出たるむかしにおほえてたはむれに我文字をもて
号なとして暑さ日はしたに陽烏西の山やしに新たに建る折より
称ふへきはあひのおりからのひ涼み毗耶居士乃室よりいとせまく
明恵上人乃松の床にもまさりてはなれ世乃さまよりは
すみよくて志ら志く塵外乃おもひをなれ上野浅草乃甍
あるにものなれ流るみ川をなかめ山乃はにかくれて流の
まま所くはつえあるは市井眼下にみちはみて夕々ほの
花咲るはちるも家く乃蚊屋よりたちのほりて雉のひゝきを
雪端のきけて我身をみち波ち仙をうかゝふありもの独坐
云言にして塵腸を風にはらしあるときはひとりふける

して酒のゝ狂句をかける祢ゝに加座れる爲は得意乃友也
るはへく新に飛のふかきかすともわかゐ交ひ侍り身にしてむつまし
かの長明か日野山のけ乃すみかもなほ車二輛乃わりらひ
ありとみしかとたゝ今は太平無にはる人乃ゆるく加はめくる
めくるのまれ屋乃うへに安きもあらでのあり居る心也松風の
なり木乃とまりは住居てゆく馬のしあれ乃あり似たると
持りはわきなくて以上昔天地乃崩墜をおそれ侍老あり
かゝる人乃あれをわらふ子列子林ふるまの者をおにわらひて
あやふきは行庵ふうけるとなんと心に以下むやまちされ
もなくあれ臺を在のしひて侍りふるいあゝするに

似たるも此より生滅無常乃ありさまあれよりあやふからすしも
侍らはといひてなかひ侍りわらひて座みね

愛土瓶辞

住居にすむ此まゝに一爐をまうけ新しき川乃土瓶をうけて日ことに
す茶をすゝむあるは六盤を清らして後ひとへに松風のおとす
あり鉄も古くは侍れと鏽乃気出来る用にたへて銅まさ
にほひ侍るも真鍮といふものゝ世に今めかしかるむよりは
あまたものゝ貧素なるをよろこひ思ひかくるは
なられてかくちいさ心戒僧都乃ようつをまなれたり似たり
夜蔓をかへりみてあふなけれはこそよるの進退を自在に

土氣はらに水をすゝしかの脾胃を虚しなふに多よき
あり炭おこり茶わく時たこゝろよく口よ壽を出して志られと
きこえ松風ときこえ西上人乃よしみ雫 躬阿ほうし乃
宿乃あられきくと廬山竹樓乃夜乃おとまておもひわくはる
かしこき人に書をひらきて古人をともすとなや酒を友
とし琴を友とし竹をともとして此君乃名を得こく松を
むかし乃ともまちよめもわきハ此土瓶乃うちにふ作を登し
松のおとさひしきをともすの閑を多すゝ渴をいやむるに
多れも底りて茶をいりて蟹眼連珠乃候をまうかゝれ
なほ一盌をかたふけむもいへもかまはすおとくも言すなり

## 三猿箴　寛政庚戌年作

を作すもしれある兄を久二とよひ妹を系とよふ志きりく閑を
得て机りよれを底りてさきくもよひ字筆を握て書をかきれ
あれをすりせをと語らひて作り行かとさらとむ次きと白眼を
見まれを泣おちて耳かし侍しきの手も妹もなふせんと
見せしむかしの人ものかりいふひて浮めに作りはしく
泣くみうちふいふ作りになにおひ出らむとうちつゆやら影
折もあるふ出れた門りまちのれた袖をすりまちと事る時も
さ泣くふ捨り紀ものかり兄を捺りすゝ妹をたりかしを
のせて三猿乃あそひをなす持の作アなりくる泣　久人を

眼をふさき糸を耳挟かくし彡ハ中に来て口をおほふ
ことハ三尸を停るといふ庚申乃夜の神すなとなりとそこれ
を三猿乃あそひなとつゝきて朝三暮四にかくし津蔵る
か乃五禽乃たはふれよりも心を居しなふ事を懐さまるを
清さ津くしおもふ久乃にく法なる眼帰し乃人にも
あらハかゝるの色を見てハかる目ふさきてハうるさきまさひに
身をあやうく波な小姫か物の情ある陰ともなるはいかそう
おほなたはふれおもふ耳ふさきて花月うつ伎人の声と
のそゆあきらいはすな五色ハ人乃目志ひ五音ハひとのみゝ志ひ
せしむとそ扱かれを津ゝに無益の弁をおのまて人とあらそひ

或ハうらみいかられてくゆるあまたゝひあり犬乃よく
吠ゆるをよしとせ波人ものいふを賢と世波とかや
今より我物いふ事乃はしをわか身乃いましめとして
なからく口を鼻乃ことくあらためむとやうて三猿乃
蔵かなてうつかいましめかけの絲二子可わかちあるへ
侍る

題湖了閑窓 寛政庚戌年作

むかし芭蕉乃翁晋の渊明をうらやめる句ありて曰

窓あけてひる寐乃臺や簟

湖了主人かねてうち広きをうらやみてひるゝ乃窓をひらき

はてに酒をのミ狂句をこのミて杯をふくみては風を
まち句をはくりては月をむかふはしに暑をわすれ俗を
わすれてみれバ義皇上乃人なりとおもふ酔て寝ふ
れと次ア象潟を夢にするめはむれとおもかけも見えて
玉をひろひ珠残ありむかしの沢や白河の句を得て紙窓に
面をはりすへしとわきまへ持のこりやみをこし座をていはりあ
新句をしるし

世にそむく窓や心乃あそびし哉

一日湯治記　寛政辛亥年作

夏乃末つちはあまりたりし山やしげりにてわかれし後法林
庵主驪山乃蔭をおもひよせて一日湯治といふ催ひをなし
大いなる湯ぶねにあみ川の水をくみ入多田能義の葉をうかひ
て其ゆのかほりを慕ふわかれみなけるなき我を詠る
塩といふものをおほく加へ入されはよく暑湿をはらふ松のほとり
涼をひきおくに浴する同好乃士六七人句をおもひて心を
座より他を求て座せる人々乃一日の屋しなひにかの
やまひをおしなみむといふはまれなるをおほく句案を
こらめ手川より来かしきみ乃補しまきし清ひらく
山居乃趣をしらす鬼貫か禁足紀行の例をおもひ晋子か

新山家ほめ給ひて仰せらるゝは
夜菊も温泉乃香にかよふひろね乃郷
主治 古をかうらて精を散し今をひいて氣を
和し肉を付ふきて舎をもめ庭をめぐらて
筋骨をかううすなほ吟箱を一洗せさせ
まれ後乃俗意いよく(ゝ)めでたるべしと
なそふれ者その功を考へたる次まれて
かくしるす 樵夫夏成美也

海嘯記 寛政三年辛亥作

今年八月六日能ふる夜なかまで風きびしく吹て家をゆるがし
垣を倒すなどすさまじかりしに其の夜東海乃水をたゞよはせ
行くるあと泰山乃あるごとくにあらぬ津波おしよせ来りて行
徳中河洲崎乃ゆるやかなる中に波乃おしよせ来れ早 熊わき
まひを行くるもれ足はしれども及ばれば又もとにひるなす
くるふよし 或は家のうへに逃くるも木のすゑに津さえて
わけなく命ひろひけるを多すうち魚なりぬものかてうなるを
見むるにわかれをしひたちかなるも わかれき妻子を溺し
ひとり老たる者を浪にとられて跡なきいたちを見まもりしと
あすふに為りす悲しひなけく聲のいたう野乃虫のこゑ絶
くよむえ待きたてしうしみる秋乃せみのかなしきを見るに
くらし跡にてまた老も十人か中にひとりもふたりなき迷跡の

たくはへ船中乃家財ちるゝものおほく海に入ぬ多まく
乃これる命拾ひえむこまるもなりまゝるゝ津々乃すさ
まひに都津紀たりけるに於ゐて寓乃ちりゝもほとあれとゝ
あく井戸人ありさきくもむなしく身ゝ之るなりなり
柵わさなひこ乃家あゝす伊豆相模安房上総ま所て海ト
とゝる浜浦と山ちり紀ゝるも山津波といふ事に崩れて人
おほく失ぬといふ下をあはれひ民をやすくする
御政まうちてよ給ふひ独を多以てたのしめる中に蒼海
何乃いかれる事以ゝてかく黒波乃ゝ紀めぬみゆるをや天地
不仁ありして人を魚腹となりぬ詐古給海ちら紀星く

夜にいりてまさき火をたえ老女のわなゝき泣くけはひなきふ
しき秋のかなしきおもひにはたゆまき足を空に身の毛よだち腸
きれちぎれぬ思し物ものこれる人ありにもおもひし後乃
山里もあられを待ちつ山中の家に栖をいとなむすきまひを
求てやうやく生きのびけるをあはれなるわざなり
なるまじきことひと福のよる所なきものかくて世の中立なは
らんかく家居乃乃道立続きいかなるうたにきこえひけ
なりゆくなりとも浦のかたへ移りぬとあるに思ふ

浮海松を拾ひかゝて浦かなし

秋津まぬ鬼乃餌となるさかりくは

家は人なく人に家なし　秋乃こゑ

奥羽記行跋　同年作

翁か跡を佐川嶌乃浦の松嶋に笠をぬきすさみれ
沼乃花かつみを草鞋にむすひてねふ乃花象潟乃汀に
ひる臥乃ねふりをさますむかしの乃みちのく南部の旅屋つくに
汐をしらぬ飯襄の千嶌をおもひ居て酒田乃掛錫にをいて
茄子之川の羽山をはるかにをさむ山川凡千里をわたりて
処々乃風士をたつねて俳諧や七百句を録に携の
日記といふものを閲するに猪垠乃風色を寸紙にちゝめ

日本乃おもむきを目のまへにみるへしけふ清く日ハ
それらにおほく詠よまるゝなかに自然多ひねも清き芳野と
いふ處し其のゝ墨に一筆加へよきかふといふ事もいまの
去来庵宗賓法師筆多くなる頃こゝのを以て外の野人
随齋成美なるも去古銭翁曰英奇蘊新乃多くひす
あらすハ口をひらくなかれや

壟取集題辭　同年作

古調守老人のかけるは家の集めくもおゝくをまねかるゝを
てんたにみ侍りて彰しててるもの多くふくし外なくとよたかに書のは葉乃
ちゝまをかえりめて心乃かゝれ家の山とまゐめるゝこ侍く

芭蕉翁の風雅ハ佛祖の肝膽なりや後の俳逸傳の賛
辞まえ多れを俳諧乃綉語をもとしておのつから五
の藍をもとへる心あらりやなしむへしその巻全かうぬ
ひとをわれわうかちし附老人と倩めり連句して是非を
論し左まわら笑ひ右まさかうぬさし多ちふれも二十余年
のゆめ終おもまうけ巻をひらきれて多ちに目のまへようかふ
其の子いまの調守又乃筆のまの一言隻字もお流そうに
下の十多ひよそひ多一匣可かくせる志のあつ給す感しかり
其のうらあるひもあつしきまてその求可ゆるせ斎ゆへこの
鄙語を加へ与

めに寛し筆おかまりもあき昔

默齋　記　寛政壬子年作

后はゆきの名をもらしとおもひたち於しの名をあ川かし
ひてみ川らら默斎と名のる者あまた幸ホ志あ清く出て
おやの才まれ風流志さらひ志ろし武藏乃なりの冬に霧を
わひて秋を作ゆくなるも遠さなかての名のすみかをもとむ
すきよう俳諧の風雅をよのふて物すきさ於ひかれありよれ里
多れ長明か方丈の糟粕をきらひその斎をあつためはく
作てあらかりし乃けし器をむ子の中をあくるふはまハ

心の泉に涸ゆひあらし六の窓ふく出けして僅ふ十七字の
作意に趣をめくらしは昔なりん人の世なかしう清しきを
いひて俳の中に口ずし入ひそかに哥よ讀むといひ風雅
似たり情よみちかふ口をひらく世事をいふはなしあを
うらすなまくいひ出る句あれもうなる人乃耳を驚し
かなうは人の心を法かうはおまき一然雷乃おとし出にいる為く
ひなゝくし齋と呼のおく所に志つらひて車二輌うりつ
まへまわ情しひなし花まを東向ま居あ上野淺草に
おもひをはなち月まは南にうけて深川みつ橋に繋を
あそれひ為を咲ては廬山の雪をおもひ雲をやちてと

昊天を前りなくしむその心中むろくかぎりなきおとかく乃
ごとしある人のいふおほよそ人の氣質はその山の險易と地の
水の清濁とふよるものなりと然れバみすかる志らの
國は平地ふして擇ひろき山川の美あるところ思ひ入る物
なのみ我人なるも出せる時かりなほむさし野ひろき所
ほとりてはよく廣莫の俳諧を好むむ事やとめて為し
地の人姓は某名は葛三秘紀法ならで物くるもれを友人
かはしうれ夏成美なる

柿栊記　旧年作

崖嶽乃柿の木あつしし山の何ゝ紀風よふかれて屋根はしる

おも唐のはし津ふなる香乃浅ひしさをうらやミ咲ら唐の軒ちかく
植おける柿の木ありしかハおのつから越の野分にもまれ東
叡の河らしに吹しみ花おちて實も浅られ菓もおほろくと
あはれていくほとなくかれ果ぬ此木乃なけりも多かりけると
あはれさハりしう揚範か斧をめならし妙観か物とおもとりて
切て三段と形しなか津けて柿ゆゑのかひふ顔子か多の
ひそむられ清氏か柿のさまも此一物よりなし来れる也
卧房にはめなたに此ね时為に歌て句をもとめ清をめくら
すにたよりあるむかしある人の文字をわりて三上に在と
いひし馬のうへハ身體ともかなる須い後ひらつき跡に清かりし

われハ今枕のうへ座をて今のしりまとといひ高主人とやもす
一睡の鼾をあまんれは

句合跋　同年作

璞をいさめて血は流し和氏か玉ハ津子にあれとも是をえらも
みとめすく形しとりやいふめるむかし西行法師ハみもすから乃
うたをあつめて定家郷に判をあひてよしあしをえらハしめ
奈るわか加川しうたすめつし素堂老人もかのほとりしう
流行ることひとかれおほく句合して今の世に定家郷とたの
むへき人なかれはとて判のおもとをも清さえかりかなて好
悪をわかちぬ素ふ翁かおもとをわかれる作も似さまたも世人の

褒貶有庵はゞかる隠士乃ちから添へしかも侍ぬへし
まことにあれの人々ようく家々洋々乃音をきゝおもひまよひ侍る
んやいま此序百句を題詠はらひを五十にまうちあれる
几志ありせむとておこる頃　われ俳諧のたまふれあり　ふりをと
よき心を入侍れとも　師もなく友もなく　支えし妙を得たる
かなしてわか　句乃推敲有　おもふわ侍らひ侍れとまして物さと
めおきをせめもとるみことを加へん事　如何有おもひもとらに
なしさをくを沙汰しいそむき遼東豕をめ侍らしと
おもひ燕國の石をあつかしとせぬひかちから添えたるをあつむを
ふるひみだひ辞し来るもゆるし給ひれたらうをためにに

おのまつりのむ所にはりせて此ほとの勝劣を志るし早く清書え
えせ心ありまうせる者あまハかちうるもおほはりなく贋うるハ
女牛に腹はられるおもひふかのあしきをとえ志らうさりけむと
いふ事しても是におひ侍るはし　われ　ともよき　定家卿の
鑒識なられぬ耳なし山のみなおしと人をもとむいふ屋
きもはらふくちおしのはひらをさるあるへからすこそ

一鐘集序　日年作

はくくとうきのをおもふにうちそへてをるをあきれなる鐘乃
おとかれ鯨音ありく吼て秋乃ちから揺さふく亡居士
一周の徃年をおもひて弟子巣兆懐旧乃集はつるゝ秋句を



早稲田大学図書

はしめにすゝみておもしろにふりきを志の友たちと見るひを
何川め眉をひそめて句この轉變に方すをせむまは春秋庵ま
清ミ為して居士か耳をうるひ唇を浄めし生すのおもひけなく
目の清へまうつて誰くもあられをしときおとふなり庵し
されけ事を乃句をふるへ荒野の鼓舞を梵唄称名
かへんすす晋子か章形くしてうつゝるへ記といひ五老井か
手尓彼をもてうちなられあしいひしにも律まて度かて
極樂聖衆の音樂なりもおりひよそゆるなるへしわまさ千住
の里にひとり秋これ乃掬つるをききて所から蕉翁のふりぬ
あと葉もおりひよせてなる紀魚のなみさを清へ一味平

等の手向乃かすとは形しぬ庵しといけるか梺のはしめに
筆をとる

潮来集序　寛政癸丑年作

世にかられたる人の後のよにかくのもはなへかきもちむまと
梺の徳乃あふきひつ里ねおほふへるけるゆゑなりかしわか
芭蕉れ翁一蓑一笠に鬼をかくして杖をとはし草鞋を
慶ふ里泉石の間におもひをやそめしは称ふなくしてなま
臥むしわひ果し西上人の抖擻をふたへたるわかしはひに
浪花江乃芦まられ葉のつきにかくれてより既百年の霜を
かさねなるとも梺の道をはこひて徳をとちふものなはそむかへ

祢をまゐり昔をおもひ出たるハ彼し東奥の一草法師も
侍る我のひとりとして浄土におこなひの跡を志たひ千里の逆
旅をすゝめ聖にひとせあまた道ふり兼島乃浦に杖をひき
詣いて板ひけしいとおの時とすちなむちしありて志たしき
笠をとゞめしほとその里乃何某といふ俳士なじ人とわか名
よばれむといふ翁自染乃たんざくを手にひめもちりしか
侍るゆゑありとて法師よりちられぬほうし古き禮を拂ておも
ふに此處ハ我のかゝ根本寺にゆかりて翁の衣をぬき
侍まし御堂もなりかしく かりそめの句碑を乃わか身に
ひしくとあなたゆかりに茅くさしけるくおぼえて記とする

報恩のおもひをおこしひろく同好の輩を勧めしておやし
此月我の地の長勝精舎にかれたむけくを塚に建立ため
遂章を石にゑりて百年の靈をまつる法をはりしられ
ふそれ昔をしのぶにうつせそ枯野をめぐれ心をとゞめて風雅の
祢のもとにゑ我なきしたるをむすを孫ふとも聞にきく諸國
の好士秋句をおくりひあるハふえれはしまききておえたるもこもよ
あつめて我か名を奸き古志めて其ハ此地にかく報因縁ある
事を遠近に告むんとしきりや是身如芭蕉中無有堅と
むかし元禄乃風にたよりし霜にかれゆくとはいへども此の石乃
文字あるをや名ひ人乃名のみちとはしきほかりしか風雅に

はしめたる事乃ためしをとゞめして 猪庵の野人夏成美
隨齋の宅乃もとにしるす

南無佛集序　月年作

いはゞ百年乃むかし一束の芭蕉草元禄乃霜に屋かれ
しかはいへとも一味の香世にとゞまりて詞の花ゆかしき風雅
實をのほとりより墻をうかゞひ芽をわかちものあれはそれ乃
めぐみにもれさるやあれはこれこそ百年の忌辰に妙なる
て報恩の集はふるきのひろ葉をたゝめてしるすとも
をしはるかに中村も涼川長慶寺にて昔翁乃遺
墨をうつしてそれ乃發句塚を杉風老人のなけ記せし
舊跡なれはとて津軽乃貞松吟友を會しからの志きゝ懐旧乃
俳諧を以せなみせるけり諸家の句をひろひて集をあむけ
なし貞松遠く郷土をはなれて都下に門生をひきゐるなり
風雅をひろめむとして此地に杖をとゞめ此時におへ報恩
乃よろこはしけれも同好に告む心なくへならさや此の集を
なも佛となりけるましき文辭にてある翁乃徳にもれて
ゆきをわかなみ成美此題号をえらぶに我等小根小樹の
なくひ汝てもよく芭蕉佛に帰命せよ平等法雨乃うるほ
ほひにうるほしてすこしき草乃うてなにもさゝ流を
あらはしめむずかしき次なくならむわさ涼しき此地にすみ

志乃時にあへ移れなしき後ミひ不情さ移きをわきまへて
秉のかれ葉の志るしに禿筆ぬらして書

早苗集序　円年作

みちのくに志のふ乃郡にしられたる捩をしたひまつれる
ゆゑ遍昭寺乃沿麗の為しにすゝめて奇しきを記す
はる里きたりこ事て世の人々もて興せしといひ傳へたる昔
ふりをしのふへき揚こたられ わきまへへし 顯昭法師の
説にも 信夫郡といふ所にこちすりと云みだれたる事を
するなりといへり清しある説には昔しに大きなる石なる
ありてその石にすりもしうかしなるともちすす事といふと

移むかし乃石は汲え土中にうもれて里人の不事面を
見るは世尊の翁奥乃おろみちほそ腰りわけ後えひしに
早苗とれ手もとにむかし志のぶるおもひをのべなる捩の翁世よ
移くなりて百年乃むかしにあらはれるは俳諧乃はなみちたらし
なれてまさか乃むかしを志のぶ方人等が原文中に洛乃丈左
法師おきれの枚乃ゆかりを志たひ奥羽乃あひさを伝まよひ
ありきて尊く乃遺跡有なみをもとききはひに志のぶ郡
山口といふ処に翁の傳への句を石有あらはすも後の人孔
今を志のぶの茂みにのこすその碑石を求めてゆくり
移くひと川乃石を得たり石面縦横有文あらでまり

まく添むかに水の津かくさなまさる、けやあまおもふになる流の石
ふる河ありといふ詞れひゆ河なるへしとめて興して詠たる律して
好す乃家におほこまの乃みまの庵まもてなやせしころは
すきにひとしかるしなほ古みすを世に知らくせむやと人
く乃句をえひ集にあつて幸文法のひふもほのめけむと
あま誹あそ法しをはしめにおる世とゆかるまくとちすり乃
こんなれるおと葉ふちふるもむかしおほ乃ふ知れなし心に
そる次ゐとあるをける乃ゝ

雨月帖序　日年作

ふるき連歌ほ好ふせ座をふ紀をわかちふときおえしに

月のひかり夜乃おとかかれくるをしめておもふ心を津きぬし
とゝや詩のおもゝ添を心ありして宝を夜月をあ津けてすまる河の
本ゆきにきある人あまかれ西湖を美人すなろへて情そ
けりにさし夜も清き斉なまといひとむを古われ風色す
おもひよ詩人多津ふにそのふる河のあひかにかそふおなし
古のみに作詩婦もあはありて俳諧乃連句して心をやけく
あ東す誹あるし法るおやかりてすゝき河の居をかみさ川
乃ほとまにふ河せまおもまき寓窓に月を得蓬莱す
夜をきくすはしめ乃おとし誹を清ひの市井を法る年
遠うしぬい究色上人の米かひ酒賣の中にかまるせし心あかさ

なるべしと同檐乃もとに侍ることありて夜月乃閑をぬすむため
盈る月はもとより秋も月なくて夜を短く日も例乃狂句をこのみて
いふ見を扇に書つくるかはりし乃扇すゑハまこと月にひとしく夜
はまじくあるをこれ乃おもひて人はなりせむとあるべし雨月乃
あらし名を心遂おなし必に月と夜をもて友としてかく筆残
かくるもそれハかつ侍しり乃野人夏成美なり

送乙二帰古園　同年作

みちのくの乙二ぬし去年の冬しら河の雪をふみて東都の
春をあそふすゝ侍りぬ旅乃心もなかりしのとめてよとわり
かつしかの法林庵に草鞋の駕をとゞめてよるも一日も跡

外にも梅をはなちて侍る乃日を深川の寺を硯に汲て十七字の
風情に方すを志りぬ爾後五十余日あるひは雅務を
吐てのちに涙おちてあはれなるものおもひとなき友といふもおほ
論るふちりしやある日乃夜話にわか口質乃化意よるて
雅情乃たらさるをうらみまして論説を談ず我乃あと乃
深切なるわか肺肝をはらす道に望をかけても
古人乃あとしやいへおもなる侍しかり乃たらひなるべしかくて
梅ちるを柳みどれていまた蓬窓のほとりにあそ手乃涙をそゝぎ
離情にとゞめえて今日も花ふかなりへ波たゞ墨水のあはれなり　ゆひ
はなして再挺乃詞をもちふる乃を

春はふし新まわり新すゝく川
あすよりや蝶乃ねくらになきあらむ

## 規矩録序 同年作

俳諧乃修行ハ梓匠輪輿の人が規矩をあたふるかごとく
形ちす本来一物なき心上よりなし出せるわざなれバ一線の
おもひなきやまちより卑俗野鄙ふおち入あるひハ理屈理を
はなれたるかぎりに至るはれを世に正みちに名ある人の作意を
かみよりておのがえふくきを為しとかくに十余年乃
非をさとりむかしは ゆゑ人のはし人 あるもやるハふたつのはしよ
きこえたるも机右に書とゞめておれはむかひて三復のおもひ
をなさバかの梓匠輪輿のきくになさらまほしくなむといひ
ねるにはべりわが心の我心ありとして一人の物まきのなかにおとも
おもてのおもかげにかゝはらはゞく諸子乃花意ぐ乃ことゞくなれを
いはまにさとりひとつまゝをよしとせむやわが心これをなしへて
そのおかしきゝ趣のよしをゆるされなしかゞる言葉のあし
きを捨てはいの師となし侍りきを心にたひおはりにけらへて
さけらく途中乃是非ありあるふまれなるや勝鹿乃野夫

随斎成美

かゞみち集序

淮南乃たちはなを北の地へうつせは枳となると陰陽風土の
ならひなるに正風起りては芭蕉の翁かつてたちかへり
いはゆる平安のわか俳諧なりしはさるまて替りきたる事
汁のあちはひなりしも支考しと云ふ風調乃おもしろかりしさはれ
いはゆる水土のかはりにとま達体頗志かいへとも田舎にみやこの
てふりをうつせし繁花の都中にすみてひなふりを治ね
うまれたるものも俳諧へし我か東都や晋子か豪邁
なるひとは天下乃俳諧を推断しておほいに洒落の
風をおこせしもそのすゑ謎字乃体なるにおち入てきく人も
いふ者もこゝろにその落處をしらさるなかにあるをせ

乃風といふもはふさひ世に唱ふるものはいへともおほくは
支考か手すちにして風格くたりてひなひへり野夫村童の
雑談によろしきはことはを翁の風調にならへれを氷雪水
昌との似たるものはあやまる事蕉門乃苗をみるかことし
これを風土の習ひにもなし心をかしこまりうつりさそ
なとかにけに庵くり同調乃友ふたり三人いひ語らひし
稽古乃書く文臺に積もなる反故乃中にもあのをかゝ
をりをりきくしるしあまたくも竹の子乃代々の作者の跡を
はおむるにもかしねとれなしものを人くもきえせ
おしくもて末にあらはれて板にうつりそへて庵かれて其の集を

かゝるたちといふはこれ実にへ花さへかくさし紀むかし人の
心乃色香をおのゝ袖にうつさむとなりしなれ俳諧の
名にしてよしを見に志たひ水をきゝて牛をかへし雲を
志のぶ時を志ひねふるといふ事を撰者にかへりて淺
草乃野人随宗成美みつからに筆をとれ

書九一年後　寛政甲寅八月作

雪あらき寒くせむとおもき夜ハいつしかと春乃ひかりを
待ちみな月のはちさへ咲くるなつ乃白き萩のなつ乃花を
おそしとおもふ見を長しといそむもむ庭なるへし梅と
ちるはなに火すとるて秋のしられよふるこゝろあると志るせる
みしかしとせむも待こむへなる也一年の集を長しみし
かしといふをとふかり能かくわすれて毎日一日乃變化あり
あるふ年三百六十日ほ后はしめなるをいま度々満紀の
はしめき心あるへしにをひらきて笑ふ日五日有るほと
いひ乃むれひ然りにおもふ我何そひをとゝ志らは新との
なるを

墨水翫月記　寛政申寅九月十三

友をはなれ故こかしめ乃ねくらに為のむ椎乃木庭数の
露臨有り十三夜乃月は出る秋泰昌とゝもに我流有
うふれる待庭のわかしともあらひの影ふ浮ありくは

なれをとゞめさせて暫く庵乃門のまへに舟をとゞめいは
ゐまへすみゝ河の月見に出いふよしありし硯を取出
し給ひし茶を呑つさへて舟乃むし呂を出もうれ觀音
乃農舸をひらて月やまれ座りにひもい河五百隣の
むら竹三めぐら紙木ゐちうすきり乃ゐちあめま紙
清手のあとなれとなほ一輪の玉にとてちやされて百般の
媚をそへたるまたや清河ち山乃あら雲は彷徨せる
倡婦の水樓をかまへ月をひきあをむら隊何まさ波に
条竹の志くへを行ふ孔子乃はなてもなりておほく棹を
り座すも見ゆるそわりゆきや昔うきに乃まて何まの河ま

以またなきら紙おくらも紙河らなおも移てひ出へし牛渚
志ら蘇石濱などかを之行てきみら河よいらなろ月を三笄に
已て金波乃中に舟をうかまよ四邊いか志河うに出乃音
けうらにきあえねらぬのぬ夕像くお怠するに催されて
硯を取りし句を求めよ時といひ更にいひ世の中乃あと
みまわまれておきらく月中に身をおくに似たるべし

わら舟や新と月お乃寫りあ理

原うてすゝら河乃水を汲て陸氏が句しみをまねひおのく
六盤乃奥ふりる湘水楚竹乃風流な紙座しかくて雲とぞひ
雲来てくもはて雲あ河まりていい河おぼ月のあと所をうし

なふに舟中ゆしろかく浅草乃かねさそふに耳をおゝせた
社奥の河はたちかいよりて流にさそひて舟をかへさん

後乃月まちになりてふけよ乃経

あるひて之行序　寛政乙卯年作

むかしわすれをうれふるものあるも弓矢のためしくわひて
馬にうち乗りゆく小みちのゆくてよ座まちふせてたちかし
かねおき為る矢をとりて身をおいたかせたりと打ほれ打と
路きまつ弦のするをみてさわしよ紀ありてみつ浅たりと
座きてうちのへてまさ世帰りまぬとてわれは侍ゆくれたるもかゝ

そして妻を侍りまて雨をわすれをよう座みて筆をと
わするれおれらをとすまおのちひさきまれあるをあひむかし乃
すれ人ありて書にあせる句まも目をとられたゆるちに詠あく
耳をかふけても待らにうらまうに多くの四十年すきて
心なれるおろく侍さ一層乃をすれを侍まも待まを物すり
かなしきめてをおいりまれのむかしろをまもまて待つまさ座
よみ見をえんとして花鳥にうつくしまる人々の心をけみして
世の中乃ちかきのおもひをとおれわすまをまはわもれの
大かるもおゆるの庵し

散花集序

今ハむかしけるまのちに鹿児の里にかまみやこの俳諧
山李居士とて世にしる名のきこえたる人ありけりいまし庵
水無淵乃和哥堂に栗のかくいふをさそられし名を松そ
ひて無心所着乃一体をはちふ歌よへし楼乃栗とすなる乃ちやし
志けくなるをゆく清くおさきあの清うちわみちをおして薩をたのみ
杖をとるもの多くありけれは中にも殊たちの国玉層法師と
居士かひとくせをうつしてみつ栗の心をまもれやあわく
画くもなし居士かりて心ひかるくわきまへ山水のわかりひ清ふに
たえはひとりひと松嶌象潟に杖ひく陸奥清く當時し
路ハわらきは志あし任せる物ともなけりしるとなちんせに

ゆへありしに病身かしくにおいまさりそのおとろへたまひて
はひにみわりしたまひのむなしき紀物かたりとたちよりけ於
此ま江ふりしの春居士か心けしを果さむとて法師草鞋
をひむりしにふみてよりけ我国ふいける居士か終焉の尼寺
ありておるにかられ住る寺ありてむらしをかゝる但今をなけ
くのあまりかきけり門人にかたらひて日ころうしの里ちか紀
大龍寺といふところに居士か遺章を石にゑりつかせその
人おかるみ跡かくうてましてのちちくハ世にしき古跡とも
なるその心をへなるへし　その句

ちるはれ乃花よるとおさるあらしかれ

榮落一瞬のけしきをたとへいふまも侍れハかの無心所着乃たくひともいひ出し来れるも我の心乃たゝならぬものをおのれしら知恩し法師なりて白河のせきにあそひとするにかの事乃ゆかりなし集のはしめに書付をまいらにかそへあらしく筆をとりて落花可むかひなる往事を記るす

隠説

聖人乃端も麟なるは隠者の兆とて鹿なり麻碌音相かよへて隠士とひさすら名をはなれみつからに碌々たらむものなりと



右寛政卯八月廿七日暁天夢中作覺而一不換一字録焉

贅亭記　寛政乙卯冬十月

かはしまれ東江寺にあそひおりし後を庵ねして佛をまつりのうき津の國多田乃莊石峯寺乃靈佛あらしか五百年のむかし干戈のさわきに寺塔も闘争乃ちまたとなりて僧侶も依なく逃ちりとのちは乃營をハ石乃うちひりこめて年月なといはかりありして土中にうめりせしか此の後世中もいかなりてほり出はみ経せしをける由思あまたにしうりとまく所郷よりはしまりぬとそ画像乃趣よいは侍るれまかの

石乃はこも寶庫につたへて文永二年三月砂羅連山石峯
寺とゑりつけたる文字乃あまたみえ侍る いとふるき寺
院にて土石わさとならぬ物ふりたる御堂の處〻に
茅屋ひとつありてかよひ住侍るの許と新に端しきたに
侍るひと間乃挾室をしつらひ廣サ一丈にみたぬ東南に窓を
ひらきて冬の日をうけ筆をそめ硯をむかふ中に一炉を
かまへて寒をしのかせ茶銚をもまうけたれとも蕉素乃堂を
うつしかへて紹休二子乃法をうつし得すせし萱乃屋
厚くふきて竹の椽板乃ひきしかなりても世にかはりたる
はしらも屋をつくりに住ひ所の用をみたすのみにて

事なくわさ〳〵しくたのしとおもひて我心人ゆかせまほしうもむ
とせておもふにほとゝきすきなく四千不肖を知る所ハ
事をはふれ物をまくなるらしてわすれしひなき志らるゝを
なと住ひにおもひまし人もうらやしとい又さ心乃
うちそめてかゝる無用乃室をも侍らむとをそ人も
ひとみいはひ乃物は象にならひて好まし乃いてきるるやう
なきはとて夜の贅亭とく名付けたる庭に梅の又
株を植て春をまつ夏はまちかく柏ちる桐いはまりの
竹あまた植えたにうるひさらにあのはなり木蔭おほくて
おのつからおもしろきさまなれと鳥語よもものいひうらみす多く

むかし乃木草のとこしなひもまさらへに五尺乃盆池あり蓮乃
根をふせ魚をそだてき土地ハ菜によろしく水清くて青泥の芹
白鵝の栗も處につくりてうゑしところ淡家よハ蒲笥翁かはま
子なりて出入るに津等ても杖をむかへ門よ清川ぞはき風
志川のなる日ハ雅子ともはさへてなるまちなれかまたに
歩をすすむ清川浅草ちの御堂むかし牛鬼といふもの
あて安居の法師をおどろかしけるといひ伝へしハ人め
なれ在りとおもきそふえ侍るに今乃ふれをひハいふも侍らねて
長嘯子の日記にも國申すて清みたると書る所前れり
真土山ハまつち川よのをみて万葉乃古名を志たふ木母寺ハ



梅わか丸の古墳かつみの池ハそのはし御茶乃旧跡とも鳥
越り天英乃変をおもひ牛島に貞観の碑をありぬ業平
天神ハ在中将乃竹をのおし吾妻の森をなちぬれ姫乃
みふ子のうちあり牛頭山ハむかしの御茶に云なり駒とハ
花形よ清らなれ石濱ハ千葉家乃古城砂利場に實盛か
石塔をみる三園ハちかく晋子か雨をおひ清く波山をほる
嵐雪か雪をのこし淡土野浅ちの清らし木かうしいと
清らくふれまさるは清く家よりへなて独酌乃橋よ對す
清き山も人に志かしきねをみをすちなれ石清多月を
あさらく境界乃あたへゆかして據ろに筆をとゞめて

妄語をさるにたゞ贅乃まゝ贅なるあるのミ

四山藁巻一終